



「桜田門外ノ変」ゆかりの地 常陸大宮市

平成22年10月16日、映画「桜田門外ノ変」(佐藤純彌監督)が「いよいよ全国公開されます」。

この作品は、茨城県民が企画を立ち上げて3年がかりで製作にこぎつけた映画で、茨城県内の多くの方がエキストラとして出演したり、炊き出し等のボランティアで協力したりする等、地域主導で進められ作られた映画です。



▲桜田十八士の一人、関鉄之介(大沢たかおさん)の妻ふさ(長谷川京子さん)の実家としてロケに使用された諸沢地区の民家

映画の撮影は、平成22年1月20日から3月下旬、桜田門のオープンセットがある水戸市の千波湖畔を始め、常陸太田市や城里町等の水戸藩ゆかりの地を含む、茨城県内の12市町で行われ、3月には本市でも行われました。

撮影のため、水戸市のオープンセットに集まったエキストラの皆さん



桜田門外ノ変は、江戸城桜田門外において、水戸藩の浪士らが、大老井伊直弼の行列を襲撃し暗殺した事件で、襲撃には水戸藩の脱藩士17人と薩摩脱藩士1人、合わせて18人が参加しました。

そして、襲撃後、現場から逃げ切り明治まで生き延びたのは18人のうちわずか2人。そのうちの一人が海後磋磯之介という人物で、襲撃後現場から逃げて身を隠したのが、常陸大宮市小田野地区でした。

海後磋磯之介の名前は、平成21年4月まで広報常陸大宮に毎月掲載していた「ふるさと見て歩き」で取り上げたことがあるので、記憶にある方もいるのではないのでしょうか。

映画「桜田門外ノ変」の公開の前に、歴史民俗資料館大宮館(☎521450)協力のもと、平成20年広報常陸大宮12月号、「ふるさと見て歩き」に掲載した「桜田十八士 海後磋磯之介」を再度掲載します。



▲海後磋磯之介を演じるのは俳優大岩匡さん。
写真は映画の中の一場面

写真提供：©2010『桜田門外ノ変』製作委員会

桜田十八士 海後礎磯之介

◇桜田門外の変

万延元年（一八六〇）三月三日、雪の降る江戸城桜田門外で、大老井伊直弼が暗殺されるという事件が起きました。

開国問題と將軍継嗣問題で揺れる幕末、十四代將軍に紀伊の徳川慶福（のちの家茂）を推す井伊大老はじめ譜代大名（南紀派）と一橋慶喜を推す親藩と外様大名（一橋派）との対立が激しさを増しているさなかの出来事でした。

安政五年（一八五八）に井伊が大老に就任すると、勅許（天皇の許可）を待たずにアメリカとの間に日米修好通商条約を結び、十四代將軍に紀伊藩主慶福を就任させました。攘夷を遂行するため朝廷から水戸藩に密勅が下され、それを返納させようとする井伊大老側とそれを受けた藩内勢力に対して、水戸藩内の攘夷派は勅返納を阻止しようと、水戸街道の長岡宿に大勢で詰め寄せるなどの行動を起こしていました。水戸藩の尊攘派は幕府からの弾圧を身をもって感じていたため、その中心人物である大老井伊直弼を排除して尊皇攘夷を達成しようとする動きが出てきました。

そのため各地の尊攘の志士との連帯を試みますが、協力はほとんど得られませんでした。そして、水戸脱藩士

十七名と薩摩の有村次左衛門による大老襲撃が実行に移されました。

◇海後礎磯之介

桜田門外の変の当事者、いわゆる「桜田十八士」の中に海後礎磯之介という人物がいるのを御存知でしょうか。

礎磯之介は文政十一年（一八一八）本米崎村（那珂市）の三嶋神社の神官の家に四男として生まれました。水戸に出て剣術や砲術を学び、水戸藩の郡奉行だった高橋多一郎や静神社の神官の齊藤監物などと親交を持ち、影響を受けました。のちに礎磯之介の実兄糸之介は、小田野の吉田八幡神社の高野家に養子に入りました。

桜田門外の変後、十八名はほとんどが斬り合いによつて絶命したり、自害したり、獄死や死罪になるなどして悲壮な最期を遂げました。

明治まで生き延びたのは増子金八・海後礎磯之介の二人だけでした。礎磯之介の実兄糸之介が神職を継いでいた吉田八幡神社には、糸之介の長女が当時を思い出して書いた覚書が残されています。この史料によれば、礎磯之介は三月三日の井伊大老襲撃後、数週間を経た三月の末頃になって吉田八幡神社に来て、当初は屋敷内の「神座」という人の出入りのない部屋で過ごしたものの、大半は発覚をおそれて裏山で過ごしたと書かれています。また、礎磯之

介が来てから高野家の米の買い入れ量が多くなり、出入りの米屋に怪しまれたこと、隣人がもたらした情報により捕り手が踏み込むことを事前に察知できたこともわかります。裏山に隠れ棲んだ礎磯之介には糸之介自らが食料や酒を持って山に入り、大声で詩吟や歌を詠み歩き、精神が錯乱したと周囲に見せかけて、山中で礎磯之介を探しまわつたと書かれています。礎磯之介が小田野を離れるときには、糸之介の妻が真綿の胴着を新調し、職人の姿をさせて見送つたこともわかります。この辺りの記述は吉川英治の小説『旗岡巡査』（『吉川英治歴史時代文庫七六』）講談社文庫一九九〇）に反映されています。吉川氏が礎磯之介を小説化するにあたり、吉田八幡神社神官高野家を取材したものと思われま



▲海後礎磯之介肖像画

同家には礎磯之介の肖像画も伝わり、社家の庭には「海後礎磯之介潜居趾」の碑が建てられています。この碑は水戸出身の実業家で宮内省式部官を務めた高橋暉の撰文によつて昭和十六年に建てられたもので、裏面に礎磯之介の事跡が記されています。



▲「海後礎磯之介潜居趾」碑

小田野を離れたあと、礎磯之介は会津や越後に潜伏して明治維新を迎えたといわれています。文久三年に罪を赦されると、元治元年、藩内抗争に際し那珂湊の戦いに参加し、最後まで水戸藩の政情の中に身を置いたのです。

その後、警視庁や県庁に勤務し、七十六才で病没しました。墓所は水戸市の常磐共有墓地にあります。

井伊大老暗殺という日本をゆるがす大事件の当事者となったのち、心を赦せる兄を頼つて江戸から小田野までたどり着いた礎磯之介の安堵の気持ちはいかにかりだったでしょう。このとき礎磯之介は三十二才でした。幕末の動乱の時代を生きた一人の青年の半生に小田野の地の記憶は深く刻み込まれたに違いありません。

皆川義夫さん、皆川健二さん、高野ハルエさんに聞き取り調査に御協力をいただきました。

■「ふるさと見て歩き」を広報常陸大宮10月号より再び掲載します。